

〔島内流通農産物・島外出荷向け農産物の生産〕

丸莢オクラの生産技術の開発

～整枝剪定方法の検討～

松本 剛・櫻井文隆

(小笠原亜熱帯農業センター)

【要 約】丸莢オクラの多収穫りのための剪定方法を検討した。5月上旬に摘心することで、特に需要の大きい8月上中旬に生産量を増やすことができた。

【目 的】

小笠原では丸莢オクラの栽培が行われており、味の良さから人気が高く、島内はもとより島外にも出荷されている。しかし、整枝剪定等の生産技術が確立していないこと等から生産量は低く、島内需要をも十分には満たしていない。そこで、需要の高い時期に高収量を得るための剪定方法について検討する。

【方 法】

‘八丈オクラ’を供試した。試験区は、1) 随時剪定、2) 放任、3) 一斉剪定、4) 摘心、の4区を設定した。剪定方法は表1、剪定時期は表2の通り。耕種概要は、3月10日に播種、3月27日に7.5cmポットに鉢上げし、4月11日に露地に定植した。定植間隔等は、ベッド幅1.2m、通路幅0.6m、2条植、株間0.6m、1区10株、1反復とした。施肥は、3月18日に堆肥2t/10a施用し、4月8日に炭カルを300kg/10aとリン加安を窒素・リン酸・カリで各10kg/10a施用し、追肥はリン加安で、窒素・リン酸・カリで各5kg/10aを5月以降毎月施用した。9月29日に台風16号の影響があり、調査を終了した。

【成果の概要】

- 1) 収穫期間を通して最も収量の多かったのは放任区で、次に摘心区であった(図1)。随時剪定区、一斉剪定区はやや収量が低かった。
- 2) 1週間毎の収量の推移を図2に示した。放任区は8月下旬頃から収量が下がり、また、草丈が4m程になり収穫に手間がかかるようになった。実際の生産では8月中旬頃に剪定が必要と考えられた。随時剪定区は、収量の変化が少なく9月末まで比較的安定して推移したが、全期間の収量は低かった。一斉剪定区は、他の区の収量が下がってきた剪定1ヵ月半後の8月下旬にようやく回復し、多く穫れるようになった。
- 3) 摘心区では摘心の影響で収穫開始が遅かったが、需要の多い8月上旬に収量が非常に高くなった。有効側枝数が増加したためと考えられた(表3)。その後の8月下旬には収量が低下したが、8月13日に伸長しすぎた枝を剪定したことが原因と考えられた。
- 4) 側枝数は、随時剪定では、主枝+全側枝数はすぐに増加するが、主枝+有効側枝数は1本程度しか増加せず、また、増加するのに1~2ヵ月かかっていた(表3)。一方、一斉剪定では、1~2ヵ月かかるが主枝+有効側枝数の増加量は大きかった。いずれの剪定方法でも剪定後に側枝はすぐに増えたが、有効側枝数の増加には時間がかかった。
- 5) まとめ：放任では、6月中旬から8月下旬にかけて安定的に高収量を確保できたが、枝が伸びすぎたために収穫に手間がかかった。一方、5月上旬に摘心することで、特に需要の大きい8月上中旬に収穫量を増やすことができると考えられた。

表1 各試験区の剪定等の方法

試験区	処理内容
1 随時剪定区	2.5m程に達した枝について、側枝を残すように剪定
2 放任区	(剪定等はしていない)
3 一斉剪定区	主枝が2.5m程に達したら高さ0.3m程で一斉に剪定
4 摘心区	定植1ヶ月後の5月13日に摘心し、その後随時剪定

表2 各試験区の剪定日時

試験区	5月13日	7月9日	8月13日	9月12日
1 随時剪定区	—	随時剪定	随時剪定	随時剪定
2 放任区	—	—	—	—
3 一斉剪定区	—	一斉剪定	—	—
4 摘心区	摘心	—	随時剪定	随時剪定

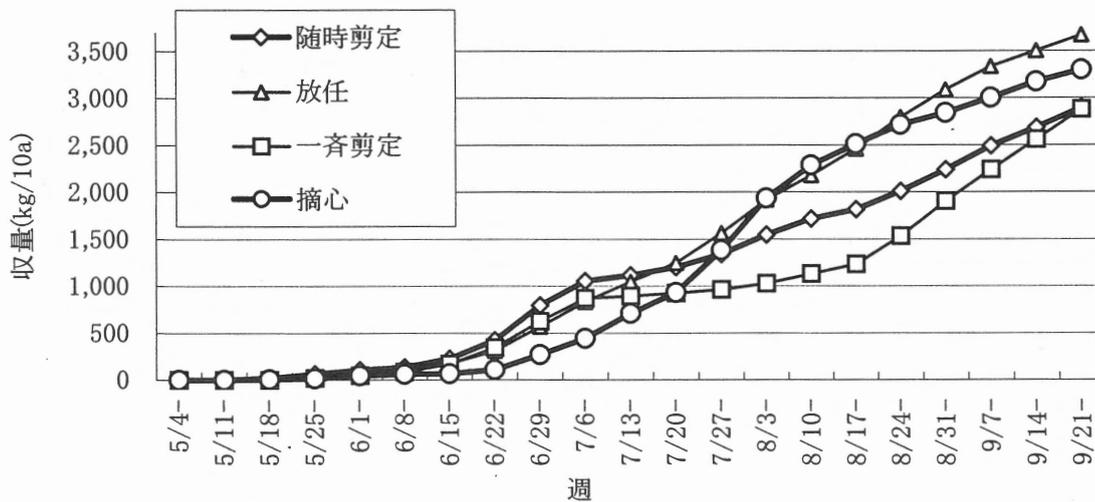


図1 収量の推移(累積)

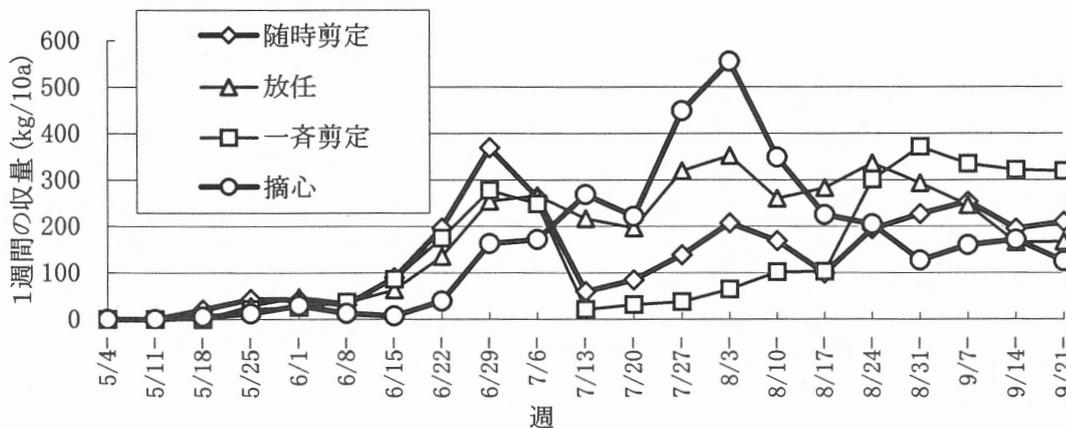


図2 1週間毎の収量の推移

表3 オクラの枝の本数の推移

試験区	主枝+有効側枝数(着花のあった枝)			主枝+全側枝数		
	7月30日	8月22日	9月24日	7月30日	8月22日	9月24日
1 随時剪定区	2.7	4.0	5.2	8.9	8.6	8.1
2 放任区	3.2	3.1	4.8	4.4	6.1	7.2
3 一斉剪定区	2.2	5.7	6.9	9.9	12.0	11.3
4 摘心区	3.7	3.3	4.2	5.6	8.8	10.2

*ゴシック体は調査の2~3週間前に剪定を行った箇所を示す。